

# 『文学論』から「文芸の哲学的基礎」へ(III)

—モーガンにおける『物我』の『一致』から『美の理想』へ—

塚 本 利 明\*

## 目 次

1. はじめに
2. 「文芸の哲学的基礎」と『文学論』の間には「革命的变化」があるか
3. 漱石とジェイムズとの接点——ジェイムズにおける「暗示」と「自由意志」  
とを中心に
4. ジェイムズは「暗示」を全否定したか
5. 『文学論』は「ある程度の自由」を認めていないのか——「第五編第二章意識推移の原則」再考
6. 『文学論』の「意識」理論はスペンサーの影響下にあるのか  
以上（専修人文論集89号）
7. 『文学論』におけるモーガンの露頭
8. ロイド・モーガンの略歴と学説
9. 「文芸の哲学的基礎」における「意識の連続」とモーガンの意識理論
10. 「私の正体」と「物我の区別」  
以上（専修人文論集90号）

---

\*専修大学名誉教授

## 11. 「物我なるもの」の「契合一致」とモーガン

かくして漱石は、「普通に云ふ自分」の存在を否定した上で、講演を「傍聴して居る」「貴所方の存在をも否定」し、「貴所方は私を離れて客観的に存在しては居られ」ないと言う。「貴所方」は、「黒い制服を着た、金釦の学生の、姿を私の意識中に現象としてあらはし来ると云ふ迄に過ぎ」ず、「煎じ詰めた所が私もなければ貴所方もない。(中略) 真にあるものは只意識ばかり」だと述べる。これを一般化すれば、「己れを離れて物はない、又物を離れて己はない」ことになる。したがって、「所謂物我なるものは契合一致しなければなら」ず、さらに、「物我の二字を用ひるのは既に分りやすい為めにするのみで、根本義から云ふと、実は此両面を区別し様がない、区別する事が出来ぬものに一致抔と云ふ言語も必要ではない」ので、「只明かに存在して居るのは意識」だけだ、ということになる。

これは、一見したところ禅的な命題と思われるかもしれない。だが漱石は、「万法一に帰す、一何れの所にか帰すと云ふ様な禅学の公案」のようなものを「建立」するつもりはない、とも述べる。「根本義」から言うところ「物我」は「区別」しようがないという主張の理論的根拠は、小倉脩三が指摘したように、『比較心理学』「第十七章主体と客体」に見いだすことができる<sup>1)</sup>。特に、“In sense-experience as experienced, there is neither subject nor object. There is just the impression which as before explained is neither or both. But in sense-experience as *explained by reflective thought*, the impression is polarized into object in consciousness and consciousness of object; and I have asserted that these two though distinguishable are inseparable.”<sup>2)</sup> (イタリックは原文) という一節である。この大意は、「経験されたままの感覚経験には、主体もなければ客体もない。既述のように、そのどちらでもなければ、その両者でもあるところの印象があるだけなの

だ。だが、反省的思考が感覚経験を解釈すると、印象は二極分解して意識の中に現われる客体と、客体についての意識とになる。これらの両者は、識別することはできるが分離することはできない、と私は主張してきたのである（傍点は原文のイタリックに対応）」となろう。

やや単純化した具体例を挙げてみよう。仔犬が肉片の付いた骨を見たとする。その時仔犬にとっては主体も客体もなく、鮮明な印象があるだけだろう。これを分析して、客体としての骨と、仔犬という主体的な意識とに二極化するの、人間である。そのとき、人間は「意識の中に一つの対象がある（There is an object in consciousness.）」と言うこともできるし、「対象についての意識がある（There is a consciousness of the object.）」と言うこともできる。両者は、異なった表現法ではあるが、同一の経験的事実を表している。前者が印象の客観的側面を強調し、後者は主観的側面を強調しているだけなのだ<sup>3)</sup>。

では、右の一節で「識別することはできるが分離することはできない」とは、どういうことか。例えばバラの花に接したとき、我々はその色と芳香とを明確に識別することができるが、感覚経験ないし印象においては両者は一体化しており、分離することができない<sup>4)</sup>。肉片の付いた骨を見た仔犬も、これに類する印象をもったのだ。モーガンは大略このような論理を展開して、「客体なくして主体はなく、主体なくして客体はない（There is no subject without an object. There is no object without a subject.）<sup>5)</sup>」と断言する（引用文中、下線は漱石）。この理論を延長すれば、「〈自己〉と〈非我〉とは、経験において識別することはできるが分離することができない様々な側面から生まれるところの、一般化された概念である（...the Self and the Not-self are generalized concepts which arise out of the distinguishable, but inseparable, aspects of experience.）<sup>6)</sup>」ということになる（引用文中、下線は漱石）。漱石は、この部分の欄外に「然々」の文字を書き込んでいる<sup>7)</sup>。

かくして漱石がモーガンの所説に賛同した形跡は歴然たるものがあるが、この「講演」ではモーガンを思い切って簡略化したところが多い。例えば、モーガンが「感覚経験」と「印象」とを使い分けているところでも、漱石は「意識」の一語で終始している。「印象」、「精神 (mind)」、「意識」といった用語を細かく区別すると、聴衆（あるいは読者）に混乱を生ずるだけだと考えたからであろう。他にも、舌足らずと思われるところが散見されるが、それは同様の理由からであろう。過度に厳密な議論は、聴衆（あるいは読者）の興を殺ぐのではないかという危惧を抱いたのである。講演の冒頭近くで、漱石は「必要上、極く粗末な所を、甚だ短い時間内に御話しするのであるから、無論豪い哲学者などが聞いて居られたら、不完全だと云つて攻撃せられるだらう」と言い、「不完全は無論不完全だが、あの度胸が感心だと賞めて戴きたい」とも述べている。モーガンと比べれば自分には不十分なところが残る、と漱石自身が自覚していたのである。

## 12. 「意識の連続」、「理想」、「時間、空間、数及因果関係」と「分化作用」と

漱石が「意識」から出発し、聴衆に語りかけていく内容を漱石自身の言葉によって要約すれば、次のようになる。(一) 意識には連続的傾向がある。(二) この傾向が選択を生ずる。(三) 選択が理想を孕む。(四) 此理想を実現するべく意識が特殊なる連続的方向を取る。(五) その結果として意識が分化する。(六) 一定の関係を統一して時間に客観的存在を与える。(七) 一定の関係を統一して空間に客観的存在を与える。(八) 時間・空間を有意義ならしめるべく数を抽象し、これを使用する。(九) 時間内に起る一定の連続から因果の法則を抽象する。以上が、漱石自身の「総括」である。

漱石がモーガンの意識理論から出発したことは既述の通りであり、モー

ガンもまた、後述するように、詳しく「理想」について論じている。しかし、両者の論法は決して酷似しているとは言えない。モーガンは、「空間」, 「時間」, 「数」, 「因果律」等々について縷々論じた後、最後に「理想」の問題を提起する。ところが漱石では、「理想」が先行する。漱石は、「意識」の「連続的傾向」から「選択」という中間項を介するだけで「理想」を導き出すのである。漱石は先ず、「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題」を「解決」するための「標準」を「理想といふ（圈点原文）」とする。次いで、「意識の連続」は「記憶を含んで居らねばならず、記憶」は必然的に「時間」を含むとして、「時間」の問題に移る。続いて「空間」という知覚の問題を採り上げ、「数及因果関係」という概念操作を論じるのである。

このあたりの関係をやや詳しく見てみよう。漱石によれば、時間とは「意識と意識との間に存する一種の関係」であり、「意識があつてこそ此関係〔＝時間的關係〕が出る」。次に、「先ず甲を意識して、それから乙を意識」し、さらに「其順序を逆にして乙を意識してから甲に移る」とき、両者を「意識する時間を延しても縮めても、両者の関係が変らない」場合、換言すれば「比較的時間と独立した」関係の場合、「之に空間的關係の名を与へる」。第三に、かかる「抽象の結果として、時間と空間に客観的存在を与へると、之を有意義ならしむるために数と云ふものを製造して、此両つのもを測る便宜法を講ずる」。最後に、「意識の連続のうちに、二つもしくは二つ以上、いつでも同じ順序につながつて出て来るのが」ある場合、「此一種の関係に対して吾人は因果の名を与へるのみならず、此関係文を切り離して因果の法則と云ふものを捏造する」と主張する。

以上のうち、「時間、空間、数」に関する叙述は、内容的には、『比較心理学』「第十三章諸関係の知覚（THE PERCEPTION OF RELATIONS）」を自由に（ある意味では乱暴に）要約したものだと言えよう。この章でモーガンは、「意識は連続的である（consciousness is continuous）」ことから

出発し<sup>8)</sup>、まず「単純な空間関係 (a simple space-relation)<sup>9)</sup>」の知覚を論じ、次に「時間的關係 (relations in time) (下線は漱石)」の知覚に移り<sup>10)</sup>、続けて「数的關係 (numerical relations) (下線は漱石)」の認識に進む<sup>11)</sup>。漱石では「空間」と「時間」の順序が逆転しているが、モーガンよりも簡潔であるだけに分かり易い。

また漱石は「時間、空間、数」と「因果關係」とを同じ次元で扱うが、モーガンは後者を論じるために新しく「第十五章概念的思考 (CONCEPTUAL THOUGHT)」を設ける<sup>12)</sup>。「因果關係」は単なる「知覚 (perception)」よりも高次の精神作用、すなわち「概念作用 (conception)」に関わると考えるからである。ここでモーガンは、「概念の形成」には「抽象と分析」とが必要であることを指摘し<sup>13)</sup>、「何故なら (because)」という接続詞を手始めに、「それ故に (hence)」、「従って (therefore)」等々の語を検討しつつ因果關係の本質を総括する。その結論は、「[[我々の] 思考が、自然は上述のような普遍的法則、つまり、全てを包摂する因果という連鎖を持つとしているのだ (...thought endows nature with this universality of law, this all embracing linkage of cause and effect) (下線は漱石)」、というものである<sup>14)</sup>。これを逆に言えば、因果の「法則」は客観的に存在するのではない、ということになる。この含意は、「(吾人は) 因果の法則と云ふものを捏造する (傍点塚本)」という漱石の表現に反映されている。漱石手沢本では、このあたりの欄外に「大ニ我意ヲ得タリ至極御同意ナリ」という書き込みが残されている。このあたりでは、漱石は一部モーガンを借りながら、全体としてモーガンを簡略化している。

漱石は続ける。「既に空間が出来、時間が出来れば意識を割いて我と物との二つにする事は容易」であり、「我と物とを区別して之を手際よく安置する為に空間と時間の御堂を建立したも同然」なのだから、「我々は意識を攫んでは抛げ、攫んでは抛げ、恰も粟餅屋が餅をちぎつて黄ナ粉の中へ放り込む様な勢で抛げつけ」る、と。さらに漱石は「此放射作用と前に

申した分化作用とが合併して我以外のものを、単に我以外のものとして置かないで、之に色々な名称を与へて互に区別する様に」なる、と述べる。つまり、「私の前に（中略）百五十人許りならんで居られる」諸君は、「私が便宜の為、〔私の意識を〕そこへ投げ出し（＝放射し）」、さらに「分化作用」で「私の意識」と区別したものだということのである。

ここで「前に申した分化作用」とは、モーガンが『比較心理学』「第十七章主体と客体」で論じた「自己の意識（self-consciousness）」、特に「主観的なものは客観的なものから明確に識別されていると考える概念作用（the conception of the subjective as *distinguished* from the objective）（傍点、イタリックとも塚本）」といった理論の延長線上にあると思われる<sup>15)</sup>。その例としてモーガンは、「私の前に石英の結晶がある（There lies before me a crystal of quartz.）」という例文を挙げ、「この事実を述べる私の言葉自体が、印象を客体（石英）と主体（私）とに分化する作用を含意している（The very language in which I state the fact implies the *differentiation* of the impression into object [=quartz] and subject [=me].）」（傍点、イタリックとも塚本）」と述べる<sup>16)</sup>。つまり「分化作用」とは、“distinguish”し、“differentiate”する作用であり、要するに「経験したまゝの感覚経験（sense-experience as *experienced*）」を「反省的思考（*reflective thought*）」によって「解釈（*explain*）」する作用なのである（イタリックは原文、傍点は塚本<sup>17)</sup>）。とすると、このあたりも大筋でモーガンの延長線上にあると考えてよからう。

### 13. 漱石の「理想」とモーガンの「理想」との異同

『文学論』と「文芸の哲学的基礎」との最も重要な差異は、前者では直接「理想」を論ずることがなかったのに対し、後者では「芸術家の理想」

を正面から採り上げたことである。前者にも「理想」という言葉が見られないわけではない。ただしそれは、「未来の大流派は旧理想を旧時より巧みに表現する事なく、新理想を斯様に表現すべし」の例に見られるように、「理想」そのものの内容を論じるためではない。ところが後者では、結論的には「理想」には「真、善、美、壯」の「四種」があるといった具合に、より具体的である。栗原信一はいち早くこの点に着目し、『文学論』が「形質的文芸理論」であるのに対して、「文芸の哲学的基礎」は「実質的文芸理論」だとしたが<sup>18)</sup>、炯眼である。

かくして、「文芸の哲学的基礎」では「理想」が決定的に重要な意味をもっている。ところが、「理想」は如何にして生まれるかに関する漱石の説明は、素っ気ないほどに簡単である。漱石自身の言葉を引用すれば、「生きたいと云ふ傾向」（すなわち「意識」の「連続的傾向」）から「選択が出る」ことになり、「此選択から理想が出る」ということに尽きる。すると、「今までは只生きたらばいゝと云ふ傾向が発展して、ある特別の意義を有する命が欲しくなる」。すなわち「如何なる順序に意識を連続させ様か、又如何なる意識の内容を撰ぼうか、理想は此二つになつて漸々発展する」というだけなのだ。

『漱石全集』第十六卷（1995）は、「理想は此二つ」の部分に注を付け、「意識の内容の選択とそれを一定の順序で配列するという考え方は、ロイド・モーガン等の心理学（中略）をふまえながらも、言語表現を範列論と統辞論の二つの方向で考える、ロマン・ヤーコブソンの現代の言語理論に通ずるところがある」とする。ここではヤーコブソンとの対比は扱わず、「選択から理想が出る」という考え方が如何なる意味で「ロイド・モーガン等の心理学」を「ふまえ」ているのかを検討したい。

既に小倉脩三は、「生きたいと云ふ念々」という漱石の考えが「モーガンの『固有の活動力』という概念」に「類似」しているとし、また、「それが『選択を生じる』というのは、そのまま『選択し、統合し、決定する



「活動力」の働き (an activity which is synthetic, selective, and determinate)』に当てはまる」と述べた。小倉はさらに、『「選択が理想を孕む」も、モーガンにおける、『活動力』の選択、決定のあり方自体がその人に備わる『本質』(essence)を表すという考え方 (a synthetic activity is the very essence of the self)に通じる」と続け、ここから「モーガンにおいて『本質』を表わす『活動力』は、そのまま漱石における『理想』と言う語に通じる」とするのである<sup>19)</sup>。小倉の表現は難解だが<sup>20)</sup>、小倉の着眼自体は基本的に妥当だと言えよう。

だが、漱石との関係で看過することができないのは、モーガンが漱石と同じく「理想」という言葉を、しかも一種のキー・ワードとして、用いたことである。すなわちモーガンは、「第十九章進化における選択的総合」で、当時支配的だった学説、すなわち、「精神の進化」はあらゆる段階で「全面的に、あるいは主として、自然淘汰による」とする学説に異議を提出した。より具体的には、最高の知性、数学的もしくは科学的能力、芸術的才能、あるいは高邁な道徳的観念が自然淘汰のみによって生まれたと考えるべき根拠はない、と述べたのである<sup>21)</sup>。その際彼が批判の対象にしたのが、アウグスト・ヴァイスマン (1834-1914) の論文「動物と人間とにおける音楽的感觉」である。この論文でヴァイスマンはこう断言する。「音楽、美術、詩作、および数学の才能は、人類の生存そのものに寄与するところがないのだから、自然淘汰の作用によって生じたはずがない」と<sup>22)</sup>。では、ピアニストの巧みな指使いはどう説明するのか。それは、ピアノ演奏以外の目的、つまり、生存に必要な実用的目的のために進化した器用さをピアノ演奏へ応用したものであり、それと同様に、本来生存という目的のために発達した能力を人類は数学、美術、詩作等に注いできたのだろう、とヴァイスマンは考える<sup>23)</sup>。

モーガンはこの可能性を全否定はしないものの、同時に、それ以外の可能性をも求めようとした。「理想」という言葉が用いられたのは、この過

程においてである<sup>24)</sup>。モーガンは言う。「美術、音楽、文学、倫理のそれぞれについて明確かつ首尾一貫した理想 (ideals)」が発達してきた」以上、ヴァイスマンが触れていない「説明」も必要ではないか、と<sup>25)</sup>。その「説明」とはこうである。「それらの理想が、選択し総合する作用を本質とする人間特有の活動の成果だと考えれば (if they [=ideals] be regarded as the results of inherent activities which are selective and synthetic in their nature) (下線は漱石)」, 数学、美術、文学等々における進歩を説明することができる、と<sup>26)</sup>。つまりモーガンは、「理想」は「選択し総合する作用を本質とする人間特有の活動」から生まれる、と示唆しているのだ。かくして、「選択」は「理想」を生む必要条件の一つとされる。

ところが「選択」については、漱石のよく知られた発言がある。「ジェームズと云ふ人が吾人の意識する所の現象は皆撰択を経たものだ」と云ふ事を論じてゐる」という発言である(「作家の態度」)。これは無論、*The Principles of Psychology*, Volume I, Chap. IX. The Stream of Thought の中で “Thought is always selective” と題されたセクションに依拠している。漱石が「借用」した「四角」の例は、「感覚 (sensation)」のレベルにおける「選択」の一例だが<sup>27)</sup>、ジェームズによれば、「感覚」, 「知覚 (perception)」および「推論 (Reasoning)」においてよりも、「芸術的分野 (aesthetic department)」や「倫理的次元 (the plane of Ethics)」において選択作用は一層明らかであり、重要なのである。「周知のように、芸術家は (中略) 自分が利用する個々の材料を選択し、相互に調和しなかつたり、作品の主たる目的にそぐわなかつたりする気分、色彩、形状等の一切を排除する」からである<sup>28)</sup>。さらに倫理の次元になると、「選択」は最高の位置を占める。いかなる行為にせよ、「ある行為が、同じように可能な複数の行為の中から選択されたものでなければ、まったく倫理的価値をもたない」からである<sup>29)</sup>。「選択」を重視する点でも、モーガンはおそらくジェームズの影響下にあるのだろう<sup>30)</sup>。

だが、「選択」するためには何らかの基準ないし「理想」がなければなるまい。漱石がこの問題に気づいていたことは確実である。「明治40年頃」「断片四一」には、以下のメモが残されている。”When I say they have to chose, two things are implied : /1. Lives chosen are satisfactory.../2. They have ideals in life, i. e., they have answered the problem ‘how to live.’ (下線は漱石)”<sup>31)</sup> ——すなわち、「人々が選択しなければならないという言葉には、二つのことが含まれている。その一は、彼らは選択した人生に納得できるということである。その二は、彼らが人生の理想をもっているということ、すなわち『如何に生くべきか』という問いに答えたのだということである（傍点は原文の下線に対応）」というメモである。

ところがジェイムズは、「理想」の問題には立ち入らないのだ。「私の心の中でもあなた方の心の中でも、(中略)排除された部分と選択された部分とは、大部分が同一なのだ」と続けるだけである<sup>32)</sup>。この言葉を一般化すれば、大部分の人間はほぼ共通の判断基準をもつ、ということになる。これは、「感覚」のレベルでは問題なく受け容れられる。漱石の言う通り、「四角」は「横からも、縦からも筋違からも、眼の位置と、角度を少し変へれば千差万別に見る事が出来る」が、人々は「吾人の視線が四角形の面に直角に落ちる時に映じた形を正当な四角形だと心得てゐる」のである。だが、芸術や倫理の次元でも同様なことが言えるだろうか。自然主義が文壇の中心だった明治39年から数年間に亘って、漱石の「心の中」と田山花袋の「心の中」とでは「排除された部分と選択された部分とは、大部分は同一」だったのだろうか。やや巨視的に見れば、漱石はかつて「漢学に所謂文学と英語に所謂文学と」のあまりにも大きな落差に呆然としたのではなかったか。

ジェイムズが「選択」の基準ないし「理想」の領域に立ち入らなかったのは、「科学」としての心理学に不用意に価値判断を導入する危険性を意識していたからだろう。いずれにせよ、ジェイムズは「選択」との関連で

「理想」の一步手前にまで迫ったかに見えながら、「理想」という言葉は一切用いていないのだ。とすると、漱石の言う「理想」はジェイムズの「選択」から直接導かれたのではなくて、モーガンに触発された可能性が高いのではないか。換言すれば、モーガンは、ジェイムズの「選択」が漱石の「理想」に転化する際の不可欠な触媒になったのではないか<sup>33)</sup>。

この推定は、以下の事実を勘案するとさらなる妥当性をもつだろう。既に述べたように、漱石は「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題」を「解決」するための「標準」を「理想といふ（圈点原文）」とした。さらに一例を挙げれば、「此徳義的情操を標準にしたものを総称して善の理想と呼ぶ事が出来ます（傍点塚本）」とも言う。つまり漱石は、「標準」と「理想」とを同義に用いている。ところがモーガンもまた、この両者を同義に用いているのである<sup>34)</sup>。“It [= aesthetic judgment] involves reference to a *standard* or *ideal*, but....” または、“Here the *standard* or *ideal*...is analysed,”<sup>35)</sup>（イタリックは塚本）といった具合に、“standard”を等位接続詞“or”によって“ideal”と言い換えているのである。これは偶然の一致であろうか。

より重要なのは、「第二十章人間心理と高等動物の心理との比較」の一節である。モーガンはここで、「理想」ないし「標準」一般にとどまらず、より具体的に「美の標準 (a standard of Beauty)<sup>36)</sup>」, 「真の標準 (the standard of Truth)<sup>37)</sup>」, および「正義の標準 (the standard of Right)<sup>38)</sup>」を論じているのである<sup>39)</sup>。しかも、これら三例のうち、後の二例では、ここに示したように、漱石自身によると見られる下線が引かれている。これは、漱石がモーガンの言う「標準」(ないし理想)に注目したことの明白な証左である。大まかに言えば、モーガンの言う「美の標準」は漱石における「美の理想」にほぼ対応し、モーガンの「真の標準」は漱石の「真の理想」に、またモーガンの「正義の標準」は漱石の「善の理想」にある種の示唆を与えたはずである<sup>40)</sup>。加えて、漱石がモーガンの『比較心理学』を熟読

し、無数の書き込み、下線等を残している事実に徴すれば、漱石の言う「理想」が少なくともモーガンに触発された面があることは、否定しようもあるまい。

#### 14. モーガンにおける「美の理想」

だが、漱石がモーガンに示唆を得たと思われるのは、ほぼここまでである。内容的には、両者が提出する「理想」には大きな懸隔がある。ここでは、先ずモーガンにおける「美の標準」を見ておこう。

モーガンによれば、「情緒」は「意識」の周辺にあって分析や分類が困難だが、人間と動物とに共通した「感覚経験 (sense-experience)」の領域では、動物の情緒的状态は人間のそれと同じような性質をもつと考えられる<sup>41)</sup>。だが、その段階から「諸関係の知覚 (perception of relations)」, さらに「概念的思考 (conceptual thought)」の段階に進むにつれて、「新しい次元の情緒的要素 (a new order of emotional elements)」がそこに加えられ、それによって「感覚経験」に伴う情緒は著しく「変容する」という<sup>42)</sup>。

モーガンは、以下の例を挙げて、この理論を解説する。オーストラリアやニュージーランドに棲むニワシドリ (bower-bird) が様々な花や果実で自分の棲家を飾るのを見れば、動物も「所謂美の感覚」をもち、眼に快い対象物から快感を得ると考えられる<sup>43)</sup>。これが「感覚経験 (sense-experience)」のレベルである。だが、ウエルズ大聖堂参事会会議場の窓を飾る繊細な幾何学的トレイサリー<sup>44)</sup>は、「感覚経験」しか分からないナイーヴな農民には強い感動を与えないだろう。「単なる感覚的快感 (the mere pleasure of sense)」に「より高度な美的快感 (the higher aesthetic pleasure)」が加えられるためには、対象の美しい色彩とそれらの均衡とを感じとるだけでなく、両者の相互関係を知覚し、「関係の知覚」に伴う

「情緒の色調 (the emotional tone)」を感じる必要があるのだ<sup>45)</sup>。この窓がもつ美しさの真価を味わうには、対象の様々な部分の関係を知覚しなければならぬ。このような「関係の知覚」から生じる「情緒の色調」が、単なる「感覚経験」に伴う情緒の中に織り込まれ、それによってこの単純な情緒に「新しい価値 (a new value)」が加えられるのであって、これは人間だけに可能なのだ、と<sup>46)</sup>。

次いで聴覚の問題に移れば、ナイチンゲールの囀りは彼自身ばかりでなく、つがいの雌にも快感を与えるだろう。我々の多くにとって音楽の快感はこれと同様な次元にあって、「感覚経験」の特殊形たる「情緒的側面」から生じる。だが、我々が単にメロディから感覚的快感を得るばかりでなく、メロディとハーモニーとの微妙な「関係」を知覚したとき、感覚経験のナイーブな快感に新しい要素が付け加えられる。かくして感覚経験を「変容する」ことによって、ナイーブな快感の質を著しく向上させ、その価値を高め、それを美の次元に引き上げるのである。これを可能にするのは、「知性そのもの」ではなく、「知性の情緒的側面に含まれる知的要素 (the intellectual element in its emotional aspect)」の作用である<sup>47)</sup>。かくして、経験の様々な側面に伴う情緒の中に様々な「関係」を知覚する能力が導入されると、それは「遅かれ早かれ複数の情緒の状態そのものの相互関係を知覚するに到るはずだ (it must lead up sooner or later to a perception to the relations of the emotional states themselves to each other) (下線は漱石)」とモーガンは考える<sup>48)</sup>。このようにして「美的判断 (aesthetic judgments) (下線は漱石)」が生まれる、というのである<sup>49)</sup>。

モーガンが比喩理論において「関係の類似」を強調することは既に触れたが<sup>50)</sup>、ここでは「美的判断」においても「関係の知覚」という考えが導入されていること、しかもそれは「知性の情緒的側面に含まれる知的要素」の作用だという指摘にも注目しておきたい。後述するように漱石は、「物の関係」を「明かにする為に一種の情が起るならば、情が起ると云ふ点に

於て、「[物の関係]を「明かにする」のは本来]知の働きであるにも拘はらず文芸的作用と云はねばならん」とするからである。この点で漱石は、「知性の情緒的側面」を説くモーガンに負うところがあると考えられる。

諸関係の知覚が「感覚経験」を素材とするように、美的判断は快・不快、換言すれば「満足または不満足 of 感覚」を素材とする。さらに満足・不満足 of 感覚は、ある経験が「心的本性 (the psychical nature)」に「適合する (congruous)」か「適合しない (incongruous)」かによって決定される (引用文中下線は漱石)<sup>51)</sup>。だがこれは美的判断の萌芽に過ぎず、我々が「標準または理想」をもったとき、初めて美的判断の領域に入ったことになる。すべての判断は標準を含蓄するからである。我々がある対象を美しいと言うとき、その対象は自分もつ美の標準に達していると判断したのである<sup>52)</sup>。

美的判断の標準を提示する第一の方法は、優れた具体的作品を挙げることである。批評家アーノルド (1822-88) は、優れた詩の特性を示すにはそれを抽象的に論じるよりも最高級の作品を実例として挙げた方がはるかに効果的だ、と述べた<sup>53)</sup>。第二の方法は「科学的美学 (scientific aesthetics) (下線は漱石)」と呼ばれてきたものの方法で<sup>54)</sup>、これは、標準または理想を様々な構成要素との関連で分析し、記述し、定義し、特定の作品がその標準に達しているか否かを判断するものである。

ここで漱石に戻れば、『文学評論』第一編「序言」で漱石は、「文学と科学とを対立相反の言語」として用いる「普通の習慣」を批判した。具体的には、文学に対する態度を「鑑賞的」、「非鑑賞的」または「批評的」、および「批評的鑑賞」の三種に大別し、「批評的鑑賞」とは「出立地は感情であるが其後の手続きは科学的である。(中略)事実上さう旨く行つた例がないにせよ、兎も角科学的であるべき筈である」とする。また「批評的態度」は「純科学的」であり、少なくとも「理想を云へば科学的でなくてはならぬのである」とも述べる。ここには、モーガンの言う「科学的美学」

の反響があるのかもしれない<sup>55)</sup>。

モーガンによれば、美的判断は本質的に内省と熟考との問題であり、個人がある作品に接したときの感動と別の作品に接したときの感動（あるいは理想的作品が与える感動）との比較から成立するという意味で、個人的なものである。しかし、いかなる判断もそれが表明されれば、社会的価値をもつ。それが、社会の一構成員としての個人の判断だからである。そこで個々人の判断は比較され、分類され、一般化されて社会一般の意見または判断が生まれる。かくして形成された社会共通の理想あるいは美的判断の標準は、個人の意見と一致しない場合も多い。それにも拘らず、ほとんどの人はこの意味での社会的標準を認めるのである。例えばエドモンド・スペンサー（1552-99）やミルトン（1608-74）を読んで特別の感興を覚えなくとも、人々はこれらが英文学の古典だと認めるのだ。社会的判断とは、真に文学を愛し、あらゆる側面から幅広く文学を研究し、文学に対する鋭い洞察力をもつ人々が到達した結果だからである<sup>56)</sup>。

このようにして認められた標準を「社会的標準 (*social standard*) (イタリックは原文)」と呼ぶなら、それは社会全体の平均的判断ではなく、「社会の中で〔特定の問題についての〕意見を形成する特別な契機をもった一部の人々の平均的判断 (the average judgment of a special section of the community who have had peculiar opportunities of forming an opinion) (下線は漱石)」である<sup>57)</sup>。美的判断に関しては、その種の人々の判断が最高だと世人は認めるのだ。美的領域にせよ他の領域にせよ、かくして「理想」、特に「社会的理想」をもつのは、人間だけに見られる特徴である。だが、優れた学者・批評家の間でも、作品に対する判断が全面的に一致するわけではない。新しい判断が提出され、それが通説との比較においてある程度の支持を得ると、それが「新しい出発 (a new departure)」になる、とモーガンは述べる<sup>58)</sup>。

以上が、「美の標準」に関してモーガンが論じるところの大要である。



基本的にはこれと同様な論法で、モーガンは「真の標準」および「正義の標準」を説くが、これらの詳細については省略したい。一言付け加えれば、「正義の標準」も「美の標準」の場合と同じく、「人類の平均的標準 (the average standard of mankind)」ではなく、「世界中で最善、最高、かつ最も純粋な人々の標準 (the standard of the world's best and greatest and purest)」だ、とモーガンは言う<sup>59)</sup>。

モーガンが鉱物学や冶金学から出発し、動物学を経て心理学や哲学の研究に到ったことは、既に述べた。彼の『比較心理学』は、彼独自の進化論によって無生物から人類までの進化を明らかにし、その中で特に高等動物の心理と人間の心理とを比較するという全体的構想の下で書かれている。したがって、「理想」の問題が扱われるのは全体の結論的部分、すなわち進化が最高に達した人間を論じる部分においてであり、「理想」は高度に知性の発達した人間のみがもち得るものとして、最高の価値が与えられる。

他方、「文芸の哲学的基礎」は、『文学論』で全く扱うことができなかつた重要な課題、すなわち、文学の「理想」を一般向けに述べることを主要な目的の一つとする。より具体的には、「情を理想とする」はずの「芸術家の理想」そのものを「小<sup>こ</sup>かく割<sup>ま</sup>つて御話を」するのが、主たる目的である。したがって、漱石にとって「理想」の進化論的説明はまったく不必要だった。しかもモーガンにおける「美の理想」は、内容的には漱石にとってほとんど参考にしようがない。そこで漱石は、「美の理想」という表現だけをモーガンから借りるにとどめたのである。モーガンが重視する「総合」について漱石が触れなかったのも、同様な理由からであろう。両者が同じく「理想」を論じながら、具体的には大きな懸隔が生じた所以である。(未完)

## 注

- 1) 小倉脩三「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学』

- の影響 (二)」（『国文学ノート』第31号，1994），および「Monoconscious Theory と『文学論』—ロイド・モーガン『比較心理学』の影響 (三)」（『国文学ノート』第32号，1995）参照。
- 2) Morgan, op. cit., p. 312.
  - 3) Ibid., p. 308.
  - 4) Ibid., p. 309. これと同一の主張は『比較心理学』「緒論 (Prolegomena)」中でも展開されているが、やや舌足らずである。なお漱石は、「記憶」とは「意識と意識の間に存する一種の関係」で、「意識を離れて此関係のみを独立させる」のは、「こゝにある水指の中から白い色丈をとつて（中略）物質を離れて白い色が存在すると主張する様なもの」だと言う。これは公孫竜の「堅白同異之弁」に似ているが、直接にはモーガンに拠っていることは明らかである。
  - 5) Ibid., p. 310.
  - 6) Ibid., p. 314.
  - 7) Ibid. なお、小倉脩三「Monoconscious Theory と『文学論』(二)」（前掲「国文学ノート」第31号，98頁）をも参照。
  - 8) Ibid., p. 222.
  - 9) Ibid., p. 226.
  - 10) Ibid., p. 230. この部分の欄外には“time”という書き込みが残されている。
  - 11) Ibid., p. 232. この部分の欄外には“number”という書き込みが残されている。
  - 12) モーガンが第十三章で人間が知覚する「諸関係」について論じ、第十五章で「知覚」より高次の「概念的思考」を論じるのは、その間の第十四章で動物も人間と同じように様々な関係を知覚するか否かを検討するからである。このような構成は、モーガンの目的が人間心理と高等動物のそれとの比較にあったからである。なお、「知覚作用」と「概念作用」とを別次元のものとして扱うのは、当時の心理学書における通例でもある。
  - 13) Morgan, op. cit., p. 264.
  - 14) Ibid., p. 285.
  - 15) Ibid., p. 317. 漱石手沢本ではこの部分に下線が引かれ、欄外に「1」の書き込みがある。これに続く“the concentration of the net result of all subjective experience into one generalized concept”と“the further conception of this net result as due to the determinate working of an activity which is synthetic and selective”とも下線が引かれ、それぞれ欄外に「2」、「3」と書かれている。
  - 16) Morgan, op. cit., p. 309.
  - 17) ここには「第十五章概念的思考」で強調されている「抽象と分析」が関わっているのかもしれない。
  - 18) 栗原信一『漱石の人生観と文学観』（日本出版株式会社，昭和22）。特に、第八章および第九章を参照。

- 19) 小倉, 前掲「Monoconscious Theory と『文学論』(二) 参照。「国文学ノート」第31号106頁。
- 20) 例えば, 小倉が引用した英文 (a synthetic activity is the very essence of the self) は, 「[様々なものを] 総合するという活動は自我の本質そのものである」とすれば充分だろう。
- 21) Morgan, op. cit., pp. 355-56.
- 22) Ibid., p. 356.
- 23) Ibid.
- 24) ただし, 第十一章「自動的行動と制御された行動」には, “For man, in so far as he is a reflective being who frames *ideals* of conduct, this statement is too crude, ...” (p. 187.) という用例がある (イタリックは塚本)。
- 25) Ibid. この他にも, 例えば “if...the development of definite and self-consistent artistic, ethical, and other *ideals* is due to selective synthesis, ...” (p. 357) という具合に, 「理想」という表現が散見される。なお引用文中イタリックは塚本。
- 26) Ibid. ここでモーガンが「仮定法現在”(“if they be regarded”) を用いたのは, 碩学ヴァイスマンに対するある種の気遣いを表わしているのではないか。
- 27) James, *The Principles of Psychology*, Vol. I. (Dover Publications, 1950), p. 285.
- 28) Ibid., p. 287.
- 29) Ibid.
- 30) 既述のように, モーガンはジェイムズの「意識の波」という考え方を採ったと明言している。Morgan, op. cit., p. x. 本稿「8.ロイド・モーガンの略歴と学説」を参照。
- 31) これは, 「意識の内容が分化して来ると, 如何なる意識の連続を以て自己の生命を構成し様かと云ふ選択の区域も大分自由になります」と説く前後のためのメモであろう。
- 32) James.op. cit., p. 289.
- 33) 厳密には, ジェイムズの「選択」とモーガンの「選択」とは必ずしも同一ではない。前者では, “It [=consciousness] is always *interested more in one part of the object than in another, and welcomes and rejects, or chooses, all the while it thinks.*” (Ibid., p. 284. イタリックは原文, 太字は塚本) とされているように, 「関心」が「選択」を生む。後者では, 既述のように, 「選択」は「自然界全体を支配する進化」における特徴の一つであり, 例えば, 動物の「試行錯誤」も「知性の選択活動」だとされる (Morgan, op. cit., p. 214.)。
- 34) 無論これは誤用ではあるまい。だが, 『言海』(明治38)は「標準」を「メジルシ。メアテ」としており, 『辞林』(大正9)はこれを「①めあて。めじるし。まと。②のり。かた。」としている。とすると, 漱石の用法には感覚的に多少の違和感が残るのではないか。なお英語では, “ideal” を “standard of excellence conceived in the

- mind ; perfect model which one strives to imitate” と説明する例もある (*The Penguin English Dictionary* [1972])。
- 35) Morgan., op. cit., p. 365.
- 36) Ibid., p. 369.
- 37) Ibid. 引用部分の下線は漱石。
- 38) Ibid., p. 372. 引用部分の下線は漱石。
- 39) モーガンが「美の標準」に不定冠詞 (a) をつけ、「真の標準」と「正義の標準」とに定冠詞 (the) をつけたのは、前者には複数の「標準」が考えられるのに対し、後者ではそのようなことはあり得ないという含意があるからだろう。
- 40) 厳密には「正義」と「善」とは異なるが、ここではこの問題には深入りしない。また、モーガンが「真の標準」で論じるのは、具体的には高等動物 (例えばイヌ) がウソをつく [=人間を「騙す」] か否か、といった問題である。Morgan, op. cit., p. 369.
- 41) Ibid., p. 361.
- 42) Ibid., pp. 361-362.
- 43) Ibid., p. 362.
- 44) サマセットシャー (イングランド南西部) の古い都市ウエルズにある大聖堂。創建は12世紀だが、参事会会議場が完成したのは1319年。トレイサリーとは、ゴシック式建築の窓等の上部を仕切る装飾的な骨組み。
- 45) Morgan, op. cit., p. 362.
- 46) Ibid.
- 47) Ibid., p. 363.
- 48) Ibid.
- 49) Ibid.
- 50) 本稿「7.『文学論』におけるモーガンの露頭」参照。
- 51) Morgan, op. cit., p. 364.
- 52) Ibid.
- 53) Ibid., p. 365. モーガンはこの言葉を Ward: *The English Poets* (4 vols.), Vol.I に寄せたアーノルドの“Introduction”から引用している。この4冊は漱石文庫に残されており、「英国詩人の天地山川に対する観念」執筆にさいして漱石は特にその第3巻と第4巻とを参照したと思われる。
- 54) Ibid.
- 55) 同じ『文学評論』「第一編序言」では、「科学は如何にしてといふこと即ち How といふことを研究する者で、何故といふこと即ち Why といふことの質問には応じ兼ねる」とも述べている。
- 56) この理論には、カントの『判断力批判』を想起させる側面がある。カントは「趣味」が「美を判断する能力」だとしたが、それは単なる個人的な好みではなく、主

観的であると同時に普遍妥当な判断力だとした。

57) Ibid., p. 368.

58) Ibid., p. 369.

59) Ibid., p. 373.